季報

二松學舍大学附属図書館
Quarterly Report

P2　図書館の現状と課題（２）　土屋　茂
P3　洛陽での謎を北京図書館で読み解く　市來津由彦
P4　「アテンション・エコノミー」と図書館　谷島　貫太
P5　「生活の古典」としての年中行事　谷口　貢
　　本を見て歩く　稲田　篤信
P6　「惇齋文庫」と平賀中南『春秋稽古』　野間　文史
P7　退職にあたって　高山　節也
　　新入生にお薦めの本　五月女肇志
P8　新入生にお薦めの本　牧角　悦子／加藤木綿美
P9　ラーニング・コモンズでグループ活動を始めよう！
P10　本学所蔵資料紹介　／　新着図書　おススメの１冊
P11～12　本学教職員著書紹介

No.101

2018（平成 30）年３月

図書館の現状と課題（２）

附属図書館長
国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　土屋　茂

前回は図書館の九段キャンパスにおける理想的解決法（図書館棟の建設）を示したが、その実現可能性は非常に低い。そこで図書館の課題の現実的解決策を考えなければならない。九段キャンパスにおいて５号館（土地・建物は取得済み）の新校舎が建設されると、１号館において若干の余裕が生まれる可能性があるので、教室を本や貴重資料の保管場所として使用することも考えられる。もちろんその場合には、空調・防火・防犯に関する設備が必要となる。但し、この方法も時間がかかり、あまり実現可能性はないように思われる。

したがって、残る方法は、柏キャンパスの有効利用となる。現在柏キャンパスにおける図書館関係の施設は、５号館 2･3 階にある本来の図書館のほかに、２号館と高校の間にあるプレハブの建物・１号館２階に一昨年作られた図書の保管場所・２号館１階のキャリアセンターの一部を借りて雑誌等の保管をしている部屋が存在している。なお２号館７階には、国際政治経済学研究科の本が保管されている部屋がある。

柏キャンパスにおいて必要とされるものは、新たに購入される本や貴重資料・寄贈される資料を保管する場所の確保である。九段キャンパスにおける貴重資料の保管室は既に満杯である。図書も九段に置くべきもの、柏に置くべきものと分けて保管することになる。柏にそれらの保管場所を求めることになると、必要なものは、空調（温度・湿度管理）や耐火・防犯設備の完備した空間である。これに適した場所は、２号館２階にあるが、狭くてすぐに満杯になることが予想されるので、新たな部屋を作ることが必要となる。その時注意しなければならないことは、５号館から離れ過ぎていると、雨の日や雪の日等に持ち出す際、本・資料が汚染されてしまうことである。それ故、適切な場所として考えられるのは、第一に２号館１階（もとは学食であって、現在は高校野球部等が使用している）である。本の保管場所に改造する必要があるが、同じ建物内であることは最優先条件である。第二に２号館と５号館の間の空間を利用して新たな建物を建設することである。防火・防犯に対する十分な機能を持つ建物とし、かつ５号館との間に渡り廊下を設け、外に出ずに５号館２階の受け付けに持ってこれるようにすることが重要である。さらに２号館との連絡通路を設けることができれば、７階の国際政治経済学研究科の図書も有効利用が可能となる。またキャリアセンターの部屋を返すことができるであろうし、新しい建物の容積が多ければプレハブに収容している資料等も移すことも考えられる。

重複している本を整理してスペースを確保してもそれを上回る新しい本が購入されてくる。新学科関係の図書類も必要となっており、新建物の必要性は高くなっている。（続く）

洛陽での謎を北京図書館で読み解く

文学部中国文学科　特別招聘教授　市來津由彦

87 年度に研修で北京に 1 年間滞在した。そのとき、旧北京図書館（現中国国家図書館古籍館。北海公園西南、文津街南）を利用したことがある。当時、中国社会は改革開放政策により大きな変化が始まったところであり、現今の電子検索、デジタル画像化前の世界であった。

はじめ日本で、北宋の儒学思想家、程頤（1033-1107。称、伊川）が最晩年に暮らしその子孫が住む村や、程頤が講論した私学校跡等の調査の、中国人による報告を読んだ。北京に入り当該地の見学の打診をすると、はからずもその報告の著者に現地を案内していただけることになった。洛陽から南約 70 キロのその名も程村（嵩県陸渾屏風荘内）に着くと、本堂が解体修理中の村の祠堂に案内された。その祠堂建築群の一番奥の、村の小学校教室に使用しているという建物の壁に、碑石が一つ埋め込まれていた。その文面は、①洛陽に隠棲するもと高官文彦博に私学校のための土地の提供を程頤が求めた書簡、②運営費用も含めて土地を提供する旨の文彦博の書簡、③私学校の建物の内容と経費、「紹興丙子（1156 年）」年月の日付、碑石作成者「程晟（程頤の孫）」の名、等であった。程氏一族は、1126 年の靖康の変により南方、長江沿いの池州に移住し、元代後期に程村の故地に戻ったらしい（提供を受けた族譜による）。池州時代の日付を信じると、約 850 年前の碑文ということになる。祠堂敷地の奥の奥にあるのがいわくありげである。謎めいた印象を抱えて北京に戻った筆者は、上述の報告が参照する地方志をひとまず見るべく、北京図書館を訪れた。

この閲覧では諸事順調に進行し障害が何も起きなかった。80 年代の中国では、筆者の中国語力不足もあるが、何かしようとすると突然障害が起こり、それを乗り越えやっとの思いで目的達成に至ることの連続であったので、不思議なことであった。図書館職員に感謝したい。

さて、借り出した書物の内、清の乾隆『嵩県志』をめくると、清初に河南府の長官となっていた汪楫という人の「重修伊川書院記」（程頤の私学校跡地と覚しき地に元代に建てられた書院が伊川書院）が出てきた。そこに、書院の経費用畑地について明の万暦年間に程氏の子孫と当地の人とが争ったという記事がみえ、碑文に書かれていた文氏提供の「粮地十頃」（記は「千畝」）が問題となっていた。碑文が程氏子孫の主張の根拠になったらしく、碑石が少なくとも明代後期に遡るらしいことがうかがえる。なお明代前期には、儒学及び朱子学振興の恩恵を被りこの程氏一族も政府に顕彰され、「賢籍」として免税などの特権を享受していた。一族のルーツを語る族譜に加え、碑石は一族と伊川書院との関係の根拠を物的に語る唯一のものであり、それゆえこの程氏子孫は大切にしたのであろう。こう思い至り、この「記」をノートに書き写した。洛陽での謎を、現地中国滞在中に、伝統感あふれる重厚な建築（ただし清代ではなく 1931 年建立）の旧北京図書館の閲覧室で推察できた。至福のときであった（帰国後、「洛陽地区二程史跡見学記 (上・下)」(『東方』87・88 号、1988 年 6・7 月) として発表）。

1987 年当時の北京図書館（筆者撮影）

時は過ぎゆき、電子検索版『四庫全書』で伊川書院を引くと、清『河南通志』に汪楫の「記」が見え、今や研究室でもこの文が見られる。では、このデジタル情報化時代に、場所としての図書館ででしか味わえない至福はどうなっていくのか。資料の本等をただ情報的に処理するだけではなく、モノとしての書物に対面し、時を越える対話を身体から深めることは、継がれていってほしいと思う。

「アテンション・エコノミー」と図書館

文学部都市文化デザイン学科　専任講師　谷島　貫太

突然だが、「アテンション・エコノミー」という言葉を聞いたことがあるだろうか。日本語で「注意経済」と訳されることもあるこの概念は、現代の経済のありかた、とくにインターネットが登場し、わたしたちの身の回りに無料の情報があふれかえるようになった時代における経済のありかたをつかまえようとするものだ。具体例で考えてみよう。朝起きて、あるいは通学や通勤の電車のなかでスマホを触ってニュースに目を通す。誰でもがやっていることだ。では、わたしたちがスマホでニュースを読んでいるとき、そこでの商品はなんだろうか？ニュース記事、ではない。わたしたちはその記事にお金を出してはいない。お金を出しているのは誰か？そのニュース記事と合わせて表示される広告を出稿しているスポンサーだ。ではそのスポンサーはどのような商品にお金を出しているのか？それは、ニュース記事を読むわたしたちのアテンションだ。ニュース記事は、わたしたちのアテンションをつかまえ、意識の時間を占有するための道具である。猟師が鳥獣を捕獲するための猟銃のようなものだ。その道具をつかって集められたわたしたちのアテンションが、広告を出すスポンサーに販売されていく。

アテンション・エコノミーの時代には、わたしたちのアテンションを獲得するための競争がいたるところで行われるようになる。たとえば現代のわたしたちは、スマホの通知音にとても敏感だ。誰かからの連絡だったり、スマホゲームの通知だったり、つねになんらかの通知を待ち構えている。この状況は、アテンション・エコノミーの時代におけるアテンション獲得競争と結びつくものだ。金鉱堀りがつねに新たな鉱脈を探すように、広告主にひとびとのアテンションを販売しようとする現代の狩猟者たちは、少しでも多くのアテンションを確保するための戦略を絶えず繰り出しているのだ。

ところでアテンションは、わたしたちが本を読んだり、授業を受けたり、勉強をするときに求められるものでもある。正確には、なにか特定の対象に没頭する際の注意力はディープ・アテンションと呼ばれるが、ここでは細かいことは置いておこう。わたしたちが勉強に集中するときのアテンションと、アテンション・エコノミーにおける商品としてのアテンションは競合している。だからわたしたちが何かにちゃんと集中しようとするならば、（ディープ）アテンションを妨害するさまざまな誘惑から自分を切り離さなくてはならない。そこで図書館が出てくる。図書館は、たんに本や資料がおいてある場所ではない。図書館は、同時にわたしたちの集中力を増幅させてくれる装置でもあるのだ。この装置を最大限に活用するためには、図書館で勉強している間にはスマホの電源は切ったほうがいい。わたしたちのアテンションは、たんに頭のなかだけにあるのではなく、周囲の環境とのたえざる相互作用のなかにある。それゆえ集中力を高めるには環境を操作することもしばしば必要になるのだ。だからみなさん、スマホを切って図書館に行こう。

「生活の古典」としての年中行事

文学部国文学科　教授　谷口　貢

昨年の６月に共編著で『年中行事の民俗学』（八千代出版）という本を刊行することができた。民俗学における年中行事の研究を体系的に提示する意図でまとめたものである。今年の３月で定年退職を迎えるので、現役の教員としては最後の著書となった。

この本の編集に取り組む中で、折口信夫の「年中行事―民間行事伝承の研究―」（文庫版『折口信夫全集』第 15 巻）という論考の重要性を再認識した。折口は、年中行事を「生活の古典」として捉え、「我々が、古事記・日本紀・万葉集等を読むのは、直接利益を得る為とか、気分の上の影響とかを別としても、其等古典を読む事によつて、何となく背景のある、うるほひのある生活を求めるからである」と述べ、これと同様に「田舎で年中行事を繰り返すのは、床しく古へを振りかへる事になる」からで、「我々の生活には、生活上の古典となるものが、失はれてはならない」と主張している。折口は、地域社会に伝えられてきた年中行事が、人びとの生活における道徳や倫理、さらに美意識の基底をなしていると見ていたのである。

民俗学は、基本的には現在の人びとに伝えられている生活習俗を核にして、人びとのものの考え方や観念、ひいては世界観を追究する学問であるといえる。折口信夫の著作は難解であるといわれるが、「生活の古典」という視座を基軸にして、折口民俗学を再考したいと思っている。

本を見て歩く

文学部国文学科　特別招聘教授　稲田　篤信

初めて二松学舎大学附属図書館に来たのは、2007 年２月５日のことであった。惇斎文庫の平賀中南『春秋稽古』を披見に来たのである。その時、二松学舎に勤めることになるとは思いもしなかった。また、ＳＲＦ事業で中南伝の名著澤井常四郎『経学者平賀晋民先生』と『春秋稽古』の一部の刊本である『春秋集箋』の覆刻が実現したのは、さらに思いがけないことであった。私にとって二松学舎は中南に導かれた縁であったかもしれない。

その四、五年前から思い立って国内外の漢籍を見て歩くことを始めた。わが国近世文人たちが和刻本を作ったり、読書ノートに写し取ったりした明清漢籍を実際に手に取ってみるのが目的である。欧米には行けなかったが、北京や台北にはくりかえし行った。北京の図書館は不親切だという伝説がある（中島長文「楡屋雑記」一）。時代が変わったのであろう、私は親切だけ受けた。

九月のよく晴れた暑い日に国家図書館古籍館（旧北京図書館）を訪れたことがあった。崇文門の定宿の近くのバス停から 614 路のバスに乗って、東単公園、故宮の東側をまわって、北海で下りる。広い門内、宮殿風の伝統建築、灯りを落とした閲覧室の情景が忘れられない。

訪書にあたって自ら立てた原則は、人を介したり、難しい手続きが必要な所には行かない、自分一人で行ける所に行く、というものであった。そうは言っても、私の語学力ではことが進まない。その時は北京日本学研究センターの若い友人たちに助けてもらった。

一昨年、台北の故宮博物院図書文献館に行った時には、事前に附属図書館で閲覧申請の手続きをしてもらい、大学図書館らしい手厚い研究支援を受けた。

「惇齋文庫」と平賀中南『春秋稽古』

文学部中国文学科　特別招聘教授　野間　文史

４年前に本学に着任した際、本誌に〈加藤常賢先生「維軒文庫」〉と題した拙文を掲載していただきました。その内容は、私の前任校（広島大学文学部）の所蔵漢籍の中に、「維軒文庫」の稀覯本と重なるものが少なからず有ることの理由を推測したものでした。その拙文の最後を「いずれ余裕が生じたなら、「加藤常賢先生維軒文庫」をじっくり拝見したいと、今から楽しみにしています」と結びました。以下は、「維軒文庫」と並ぶ本学図書館が誇る「惇齋文庫」の蔵書に関するものです。

ところで私は愛媛県の生まれです。といっても四国ではなく、愛媛県と広島県との県境に在る伯方島という離島（伯方の塩をご存知ですか）です。現在では両県をつなぐ橋（通称しまなみ海道）が架かって便利になりましたが、当時はどこに行くにも島通いの巡航船が必要な辺鄙な場所でした。ここで中学までを過ごし、高校３年間は今治市での下宿生活です。そして広島大学に進学し、10 年間を広島市で過ごし（大学・大学院・助手）、その後に愛媛県の新居浜工業高等専門学校で一般教養の国語の教師として 14 年間を送りました。新居浜市はかつて別子銅山で栄えた住友金属の城下町です。そして平成２年に母校の広島大学文学部哲学科中国哲学専攻の助教授に採用され、平成 24 年３月に退職するまでの 22 年間を再び広島県人として過ごしたことになります。

つまり 60 余年を瀬戸内海を南北に往復するだけの人生であったということ。それが縁有って、花のお江戸の千代田のお城近くの本学に職を奉ずることとなったわけです。本学には偶然にも母校中国哲学専攻の先輩である武永尚子教授がおられることは承知していましたが、やはり母校で同学年であった稲田篤信教授が在職しておられたのはまことに奇遇と言わねばなりません。稲田教授とは同じ教室でともに机を並べて学んだ間柄です（ただし稲田教授は教育学部、私は文学部であったため、当時はお互いを知らない関係でしたが）。

その稲田教授から、江戸時代中期、安藝国忠海（現在の広島県竹原市忠海町）出身の経学者平賀晉民、号は中南（1722 ー 1792）の存在をご教示いただいたのです。これまで中国の経学を研究するばかりで、日本漢学には目を向けていなかったとはいえ、広島出身の先学に全く無知であったのはお恥ずかしい限り。その平賀晉民未刊の大作『春秋稽古』の写本が「惇齋文庫」にあることを知りました。ご存じの通り「惇齋文庫」とは本学の第２代学長であった那智左典氏の蔵書です。この「惇齋文庫」本は刊本と見紛うばかりの美しい写本（現に『二松學舍大學附屬圖書館漢籍目錄』では刊本と誤記するほど）ですが、残念なことに全 81 巻中の 34 巻を存するのみの不全本でした。

とりあえずこの「惇齋文庫」本を読み始めたところ、興味深い見解が少なからず見出され、是非とも全文を読みたいと思ったわけです。その後の調査で、国会図書館と都立中央図書館とに全書が、慶應大学と早稲田大学にも不全本ながら所蔵されていることが分かりました。幸いなことに、文部科学省平成 27 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として本学の町泉寿郎教授を代表とする《近代日本の「知」の形成と漢学》（略称ＳＲＦ）が採択され、私は稲田教授とともに、学術研究班（主任：牧角悦子教授）に所属することになったおかげで、国会図書館本・都立本ともに全書の複写を入手することができました。

さらに調査の結果、未刊の『春秋稽古』の一部が著者の生存中に『春秋集箋』２巻として出版されており、これが平賀中南の故郷に近い三原市立中央図書館に収蔵されていることも分かりました。そこでこの稀覯本を三原市立中央図書館の許可を得て影印し、これに翻刻文・訓読文・解題を附した『平賀中南　春秋集箋』を、「二松學舍大学近代日本漢籍影印叢書」として刊行しました。ＳＲＦ研究員として任務の一部をはたすことができたのは、まことに喜ばしいことです。

ただ平賀中南研究はまだ緒に就いたばかり。本学を退職した後に、この大著『春秋稽古』全 81 巻を読み進めるという大仕事が残されました。もう少し精進しなければならないようです。

さて４年間の在職中、「維軒文庫」「惇齋文庫」を始めとする蔵書（書庫にも何度か入室させていただきました）のみならず、図書館職員の皆様にも大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

退職にあたって

文学部中国文学科　教授　高山　節也

本学図書館副館長時代に、寄贈図書の受け入れについて寄贈者に挨拶に赴いたことがある。その折りほとんどが本図書館既蔵のものばかりであったため、寄贈を断ることを進言したが、故あって受け入れを承諾せざるを得ないこととなった。無益に図書を受け入れることには保管場所のこともあって無理があり、一括受け入れの後、本館側における取捨選択を承認する文書の取り交わしが必要であろうとの意見を具申したのであった。その後この問題がどのように処理されたかは分からないが、厄介な問題ではあろう。

日常的に私と図書館の関係は緊密な部分があった。私の専門が漢籍書誌学であった関係で、大学院の授業で「維軒文庫」の漢籍の書誌を検討することをほとんど２０数年にわたって実施したが、授業ごとに文庫中の漢籍を借りだして教材として使用することを承認していただいた。本来線装本の館外貸し出しは不可であったが、書誌学の実習の意味をもつ授業においては、実物教育が必至であったことを理解していただき、大過なく今日に至ることができた。その都度書庫に必要漢籍を探しに行かれた館員の皆さんにはただ感謝のほかはない。私の退職後こうした授業が継続されることはありそうもないが、線装本の館外貸し出しについては、事情の許す限り今後も承認されることを切に願う次第である。退職にあたって一言お願いと同時に厚く御礼を申し上げます。

新入生にお薦めの本

（価格はすべて税込、2018年2月現在）

文学部国文学科　教授 五月女肇志

①『源氏物語の和歌』（コレクション日本歌人選 8）　著　者：高野晴代　発行所：笠間書院　2011 年　1,296 円

上代から現代に至るまでの代表的な歌人の歌を 50 首程選び、現代語訳・解説を施すシリーズの中の１冊。『源氏物語』の登場人物達が詠んだ代表的な歌を選び、和歌の魅力と共に物語のストーリーの展開を語る。長編の『源氏物語』を読んでみたいという人は、まずこの書を手に取ると良いだろう。

②『西行 ― 魂の旅路』（ビギナーズクラシック日本の古典）　著　者：西澤美仁　発行所：角川学芸出版　2010 年　907 円

本年は新古今和歌集の代表的な歌人である西行法師が生まれてちょうど 900 年になる。数多く詠まれたこの歌人の作品から 60 首を選んで解説を加えたもの。「ビギナーズ」向けと銘打っているが、著者の研究成果を踏まえた最新の学説が反映されており、１首１首の和歌の背景、作者の意図の奥深さが明らかにされている。

③『兼好法師 ― 徒然草に記されなかった真実』（中公新書 2463）

著　者：小川剛生　発行所：中央公論新社　2017 年　885 円

特に歴史学の分野で多くの著名な研究者が執筆していることで知られる新書の中の１冊。『徒然草』の作者兼好法師について、従来信じられてきた伝記的事実、具体的には家族の氏名、本人の経歴が誤りで、捏造された資料に基づいていたことを明らかにした著者が、実際の兼好がどのような人物であったかを説明する。

文学部中国文学科　教授 牧角悦子

①『変調　日本の古典　講義』

著　者：内田　樹／安田　登
発行所：祥伝社　2017 年　1,728 円

哲学者内田樹と能楽者安田登が、伝統や古典の持つ多様な価値を、対談の中であくまでも楽しく豊かに、そして自由に語った書。この世とそれを超えた世界の「あわい」を、身体的感覚から想像的に結びつける術を手にいれることによって、読者は与えられた俗世の価値観に縛られて生きることから少し解放されるだろう。

②『神話の力』（ハヤカワ文庫）

著　者：ジョーゼフ・キャンベル＆ビル・モイヤーズ／飛田茂雄 訳
発行所：早川書房　2010 年　1,080 円

太古から現在に至るまで、神話はどのように生まれ、姿を変え、人間に語りかけてきたのか。
複雑な現代社会においても、神話がいかに機能し、いかに多くの知恵を与えてくれるか、そんな神話の「おもしろさ」をジョーゼフ・キャンベルとビル・モイヤーズ二人の対話形式で読みやすくまとめた啓蒙書。

③『シッダールタ』（新潮文庫）

著　者：ヘルマン・ヘッセ／高橋健二 訳
発行所：新潮社　2012 年　464 円

悟りに達する道を探し求める者、シッダールタの生涯を描いたヘッセの代表作の一つ。彼は禁欲と苦行の日々で俗人を軽蔑し、愛と富の世界で放逸を尽くし、離れ、戻り、やがては完成に至る。
善と悪、聖と俗、愛と精神、あらゆる二項対立を行き来しては、喜び、苦しむシッダールタとともに、読者は美しい教えを見出すことだろう。

国際政治経済学部国際政治経済学科　専任講師 加藤木綿美

①『経営学入門　上・下』（日経文庫）

著　者：榊原清則
発行所：日本経済新聞出版社　2002 年　各 929 円

経営学を全く勉強したことがない人がはじめて読む入門書としてお勧めしたい 1 冊です。経営学とは何か、経済学との違いや、どのような学問なのかという経営学の考え方と、経営学の 2 本柱である経営戦略論と経営組織論の基礎的な知識を学ぶことができます。

②『ザ・ゴールー企業の究極の目的とは何か』

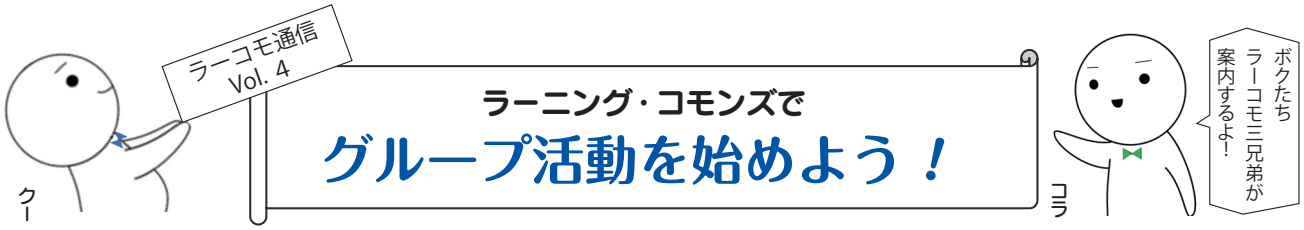
著　者：エリヤフ・ゴールドラット／三本木亮 訳　発行所：ダイヤモンド社　2001 年　1,728 円

工場閉鎖の危機と妻との離婚危機という 2 つの危機に立ち向かう主人公を描いた小説です。彼にとってのゴール、すなわち、工場が経営を立て直して利益をあげられるようにすることと、妻や子供たちと幸せな家庭を築くこと、そのために必要なことは何か、マネジメントの基本となる事項を小説形式でわかりやすく描いています。この本はマンガ版も出ていますが、マンガ版では妻との離婚危機問題は大幅カットされているので小説版がお勧めです。

③『人工知能は人間を超えるかーディープラーニングの先にあるもの』

著　者：松尾　豊　発行所：KADOKAWA　2015 年　1,512 円

オックスフォード大学のオズボーン教授によれば、今後 10 ～ 20 年で人工知能を含む IT の進化の影響によって、米国の 702 の職業のうち約半分が失われる可能性があります。これまでの人工知能と最近の人工知能は何が違うのか、今後産業に対してどのような影響を与えるのか、人工知能とか AI ってよく聞くけど結局何なの？という文系学生にお勧めしたい 1 冊です。



ラーニング・コモンズで

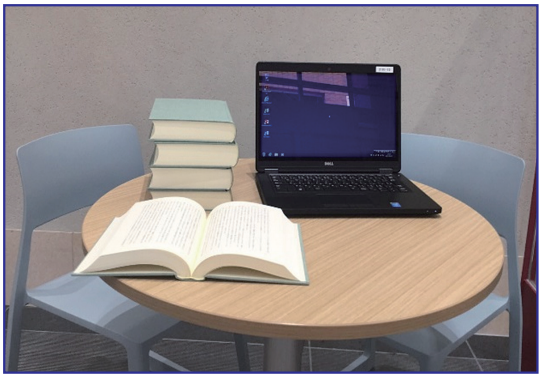
グループ活動を始めよう！

ラーニング・コモンズってどんなところ？

ラーニング・コモンズは、自習活動はもちろん、ディスカッションやディベート、グループワークなどを自由におこなうことができる空間です。仲間と活発に話し合い、学び合うことができます。
それでは、具体的に九段２号館ラーニング・コモンズの学習スペースについてご紹介します！

ホワイトボードを使ってグループワークをアクティブに！

１F・２F 学習スペースでは、PC やホワイトボード等を利用しながら積極的に学習活動をおこなうことができます。グループの人数に合わせて椅子や机を自由に動かすことが可能です。可動式のホワイトボードも有効に活用しましょう！開放的なスペースで声を出して話し合いができるので、グループワークにぴったりです！
ホワイトボード用マーカーとイレーザー、付せん※は受付で貸出を行なっています。ご利用、お待ちしています！



図書館資料を利用して学習活動の効率 UP!

図書館の資料を活用したいグループワークには、書架と行き来がしやすい１F の学習スペースがお勧めです。ノート PC を併せて利用すれば、発表資料の作成もその場でサクサク進みます。
ラーニング・コモンズの開館時間 (授業期) は、平日 8:40 ～ 20:00、土曜日 9:00 ～ 16:00 ですので、じっくり作業に取り組めます。

＊２F は貸出処理済みの資料のみ、利用できます。

※付せんを使って発想力を高めよう！

付せんの貸出しをおこなっています。ホワイトボードと組み合わせてお使いください。授業やサークル活動で皆の意見をまとめたり、アイデアを出し合ったりするグループワークに役立ちます。
パンフレット『**付せんを使ったアイデア発想法**』をお配りしていますので、ご自由にお持ちください。

主体的な学びの場として、ラーニング・コモンズをフルにご活用ください！

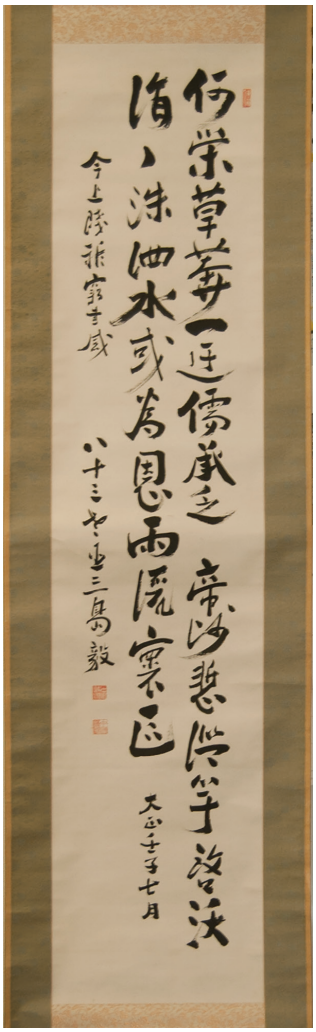
本学所蔵資料紹介

三島中洲　軸

大正元年七月

三島中洲…本学創立者。明治二十九年 東宮侍講、明治四十五年 新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四年に宮中顧問官に任ぜられ、一等官に叙せられた。

皇太子殿下（大正天皇）が帝位に就かれるという新たなみことのりを謹んで聞いて、詠んだ漢詩。



何榮草莽一迂儒　何の栄か　草莽の一迂儒
承乏帝師慙濫竽　乏(とぼし)きを帝師に承けて　濫竽(らんう)を慙づ
啓沃涓涓洙泗水　啓沃涓々たり　洙泗の水
或爲恩雨灑寰區　或ひは恩雨と為りて寰区に灑がん

何とも栄誉なことに、在野のつまらない一学者に過ぎない私が、それに見合う才もないままに殿下の先生をつとめていたことを恥じ入るばかりである。儒教に基づいて臣下として正しいと思ったことをつつみ隠さず殿下に申し上げていたことが、はじめはちょろちょろとした細い流れであっても、やがては孔子の故郷を流れる洙水や泗水のような川となり、はたまた恵みの雨となって天地に降り注ぐことであろう。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第四巻より）

新着図書　おススメの１冊

鈴木隆之著『表現空間論－建築／小説／映画の可能性』　論創社　2017 年 12 月 [請求記号] 520.4-ST

著者は建築家ですが、小説家としても活動されている方です。よって本書は建築家としての視点だけでなく、小説家としての視点を持って記されています。現実における建物を構築する「建築」と、小説や映画といったフィクションの世界における空間の「設計」を様々な事例とともに検討していくことで、〈未来〉の建築、小説、映画の可能性を見出しています。

この本の特色は本を開くと一目瞭然です。左側が英文で、右側が和文となっており、タイトルから目次、本文、著者紹介に至るまで英日対訳となっています。著者によると「英語と合わせ読むことで突然理解が深まることもある。」とのこと。よって建築に関心のある読者に加え、英語を勉強したいという読者向けの本の構成にもなっています。本の片側を読むだけでも読み終えることは可能ですが、英語の勉強も兼ねて読み進めると、とても読み応えがあり、読破した！と感じる一冊です。　（T）

本学教職員著書紹介

『東アジアにおける都市文化 ー都市・メディア・東アジア』

二松學舍大学文学部中国文学科編
（明徳出版社　2017年3月31日発行）
A5版　155頁　1,728円
ISBN：978-4-89619-944-4

本書は、異なる分野を専門とする本学教員が初学者に向け、それぞれの観点から「東アジアの文化の諸相」を論じたアンソロジーです。各論文は、副題にある「都市」・「メディア」・「東アジア」のうち少なくとも二つに亘る問題を扱うという制約のもと、執筆されています。それは、本書が「中国文学科」、及び新たに設置された「都市文化デザイン学科」とのコラボレーションとして編集されたものだからです。この、一見全く接点がないかと思われる二学科―かたや古典学中心、かたや現代文化中心―の教員がこれらキーとなる概念・問題意識をどのように論じているのか、そしてそこでどのような異なった考察が行われ、或いは意図しない共通点が浮かびあがるのか、本書は一種の「知的冒険の書」とも言えます。

その結果、果たして中国古典学から現代メディア論にまで至る多様性に満ちた論集になっていますが、各論文で扱われた時代・文化現象特有の問題点が個別かつ明確に提示されているだけでなく、時空を超えた普遍的な文化的問題群が存在することへの再認識を促し、更に今後の文化研究の方向性を開示するものともなっていると言えるように思います。

本書の構成は少し変則的で、「右開き」にすると中国古典学を中心とした縦書きの諸論が、逆から「左開き」にするとメディア関連の横書きの論文が並べられており、研究分野の違いがその書式に反映していますが、「中国・日本古典」の「現代欧米への展開」を扱った山邊報告（横書き）がちょうど中間に配置される、という工夫がなされています。

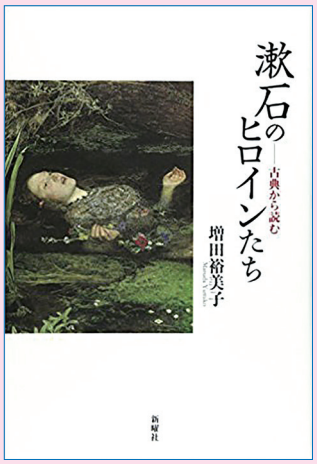
読者の皆さんには、独自の感性・視点から、これらの多様な諸論を自由にリンクさせて、日本を含む東アジア文化全体を考察するためのヒントを得てほしいと思います。

目次

古代中国の都市論―理念の王国から国際都市へ―　牧角悦子
中国の地方都市と三国志遺跡　伊藤晋太郎
中国における風景認識の展開と「図経」　田中正樹
杭州・西湖への旅のかたち―明代の日記を中心に―　植松宏之
漢文訓読・日本漢文への熱いまなざし―海外の大学における漢文講義―　山邊　進
映像と空間をめぐる関係性の現在―地図のなかの空間イメージとその技術的変容を考える―　松本健太郎
日常をつくるメディアとしてのテレビ―福島第一原発事故直後のNHK報道から考える―　谷島貫太
ローカリティの「発見」をめぐる移動の物語―「ディスカバリー・ジャパン」から「江古田スケッチ」まで―　江藤茂博

本学教職員著書紹介

『漱石のヒロインたち ―古典から読む』



増田裕美子 著
（新曜社　2017 年 6 月 15 日発行）
A5 版　260 頁　3,456 円
ISBN : 978-4-7885-1529-1

本書は私が長年続けてきた漱石研究の集大成と言えるもので、漱石生誕 150 年の昨年（2017 年）6 月に上梓したものである。これまでの漱石研究の蓄積は膨大なものであるが、本書は従来の漱石研究にはなかった視座のもとに書かれている。それは「古典から読む」という副題にあるように、漱石作品と日本の古典文学とのつながりに焦点を当てていることである。

日本の古典文学とりわけ謡曲（能）が漱石に与えた影響は大きい。漱石が謡曲に親しんでいたことは周知の事実だが、これまで謡曲と漱石作品との関連について論じたものは全くと言っていいほどなかった。一つには漱石作品が「近代」文学の枠の中で論じられてきたこと、また謡曲が近代以降、人々の間でそれほど親しまれるものではなくなったことが大きく関係している。

ともあれ、漱石の謡（うたい）好きは様々な作品を生み出す力の一つとなっている。たとえば国民的名作として親しまれている『坊っちゃん』は謡曲『船弁慶』なくしては生まれなかったと言える。（第七章参照）また「坊っちゃん」ということばもそうだが、漱石作品におけることばの多様な意味やイメージ、すなわち言葉遊びの側面は、謡曲におけるそれと通じるものがある。

漱石が描くヒロインたちにも謡曲やその他の古典文学の影響が色濃く感じられる。漱石が朝日新聞社に入社して最初に発表した『虞美人草』は、ヒロインである「我の女」藤尾の死を描いて終わるが、藤尾という女性像の背後には『源氏物語』とそれに基づく謡曲『葵上』や、『葵上』と同じく鬼女物の能である『道成寺』に描かれる女性の姿が隠されている。（第一章参照）また水の中に身を投げる女の話は、『万葉集』を始めとして日本文学の中に繰り返し登場するが、それが『行人』のお直や『三四郎』の美禰子、『それから』の三千代の造形に生かされている。（第二～四章参照）

いずれにしても漱石が日本の古典から得たものは大きい。何よりも日本語ということばの豊かさ、面白さを古典から学ぶことができたのではないだろうか。だからこそ漱石作品は今なお読み続けられる“古典”となっているのである。

（文学部国文学科教授　増田裕美子）

編集後記

「季報」101 号をお届けします。

今号では巻頭に館長の前号の続作原稿を、他に今年度から新たに着任された先生、今年度で退職される先生より原稿をいただきました。また、3 名の先生より「新入生にお薦めの本」を紹介いただき、2 名の先生より著作紹介をしていただきました。諸先生に厚く御礼申し上げます。　（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 101 号
発行日　平成 30（2018）年 3 月 15 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333